

議会活動報告

01

## 五山送り火騒動の早期解決に一歩前進!

「送り火の薪はまだ残っているそうですね。」東日本大震災から一年以上が過ぎた4月、震災が引き起きた広域処理について岩手の被災地を訪れるとき、現地で何人の方から問われました。京都ではほとんど忘れ去られた五山送り火騒動。しかし、被災地の方々の心には今も薪への想いが残っています。

東日本大震災で亡くなられた方々の鎮魂と復興への願いを込めた企画が、結果として被災地の方々を悲しませてしまったことは残念でなりません。

改めて被災者の悲しみや涙に触れ、「今からでも京都ができることをしたい。いや、託された想いのためにも、解決しなければならない」と立ち上がりました。



↑陸前高田に足をはこび、薪を提供された鈴木館の鈴木氏に今回の騒動について伺いました。被災地の方々は京都に残された薪が未だ放置されていることに心を痛めておられる様子でした。

### 2011年 五山送り火騒動の経緯 (HPでさらに詳しく説明しております!)

1/被災地の薪を五山の送り火で焚くプロジェクトが立ち上がり、陸前高田の被災者300人余りが震災で亡くなった家族の鎮魂や復興への想いを託す。

2/しかし、放射能を不安視する声が大文字保存会及び京都市に殺到。

3/大文字保存会は陸前高田の薪と、例年使用している大文字の薪の放射能検査を実施。**基準値を超える量の放射性セシウム**

**シウムは検出されず**、安全と判断される。4/それでも不安視する声が治まらず、大文字保存会は苦渋のええ「中止」を決断。その際、市は一切の判断を保存会の責任とする。

5/しかし、被災地の薪を使用しなかったことが「五山送り火騒動」として大きく報道される。

京都党は「五山の送り火騒動における陸前高田の薪の早期決着に関する決議書」を提出。遅くとも平成24年8月16日の五山の送り火までに、その解決を行うことを京都市に対して強く求めます。

6/市は一転して陸前高田の薪受入れを大文字保存会に依頼。しかし保存会はその要望を**拒否**。

7/市は次に、陸前高田の薪の提供者である鈴木氏に依頼。しかし、騒動の一連の流れに心を痛めていた鈴木氏はその要望を**拒否**。

8/その後、市は福井県のNPO団体が五山の薪とは別に保有していた陸前高田の薪を500本調達。薪の放射能検査を実施。

9/検査の結果、表皮から基準値を超える量の放射性セシウムを検出。(薪全体として放射線量を見れば理屈上、基準値は下回ります。ただし京都市はその測定を行っていません。)

10/結局、市は「基準値を超える薪を焚くことはできない」と判断し、**陸前高田の薪の使用を断念**。

11/問題は昨年の8月から放置され、今に至る。(下記参照)

### 放置された薪の現状

五山送り火の薪は、現在も西京区の京都市圧縮梱包施設に残ったままで。行政側は「市民の不安の声が大きいため処理できない」と言いますが、実際に現場に赴き薪の放射線量を測定してみると、 $0.075 \mu\text{シーベルト}/\text{時}$ (注1)。これ

は、文部科学省が公表している京都市の空閑線量の平常範囲内です(注2)。ちなみに、同じく風評被害に苦しむが引きの線量と、京都市内各地で実際に計測してきた線量の結果も参考のため掲載します(表1)。普段の京都市の生活環境と比較しても変わらない程度であることがご理解いただけると思います。放射線量(シーベルト)が低いということは、その物質に含まれる放射能の量(ベクレル)も低いと言えます。

薪の表皮から規定値を超える放射性物質が検出されたものの、薪全体で見れば決して高い数値ではない為、当然とも言えます。数値をきちんと測定して、風評被害に応対していくことが重要です。

注1/放射線を浴びた時の人体への影響を表す単位。  
注2/福島原発事故発生以前の京都市の観測地における平常時の範囲は0.033(下限値)~0.087(上限値)

表1 各地の放射線量の測定結果

■陸前高田市ののがれ置き場

	金額
生活扶助基準(第1類)	約11万円
生活扶助基準(第2類)	約5.5万円
母子加算	約2.5万円
住宅扶助	約4万円
教育扶助	約2万円
合計	約25万円

■京都市内各地

	金額
京都駅中央改札	0.071 $\mu\text{シーベルト}/\text{時}$

★西京区に保管されている  $0.075 \mu\text{シーベルト}/\text{時}$

	金額
京都府庁前	0.105 $\mu\text{シーベルト}/\text{時}$

	金額
京都市役所正面玄関階段	0.189 $\mu\text{シーベルト}/\text{時}$

	金額
京都市役所東玄関階段	0.232 $\mu\text{シーベルト}/\text{時}$



↑現在も京都市内に残された陸前高田の薪。ビニール袋めにしているが、危険だから厳重保管をしているではなく、木くずが飛び散ないようにしているだけです。(補足:放射性セシウムはビニールを透過する。)



↑薪保管施設の各所で放射線量を測定した時の様子。放射線量は京都市内の大気中線量と同レベル。

### 処分方法の提案(京都党)とその後の動き(京都市)

そこで、薪をどうすればいいか、という問題に直面します。例えば、福井県鯖江市では同様に陸前高田の薪を土砂崩れ防止用の杭として利用しています。また、一般ごみと一緒に混ぜて燃焼することや、バイオマスとして利用するなども考えられます。いずれにしても早期解決を求め、5月の定例市会で市議会に決議書を提案しました。その結果、これまで半年以上にわたって薪の解決に一切言及してこなかった京都市行政も重い腰を上げるに至りました。そこで行政側から出されたのは、薪で伝統工芸品を作るという案です。これでは結局放射性物質が検出された表皮は取り除くため、表皮の処分をどうするかという問題が残されたままになってしまいます。

ただ、まだ問題を抱えながらもうやく一步動き出しができるようやくできました。被災地の方々の想いに応えられるよう今後もこの問題に向き合い、引き続き提案して参ります。



↑五山送り火騒動で残された薪の早期解決に向けて記者会見でも議会活動を報告。

## 図書館の年間9万冊の廃棄処分本の有効活用を!

毎年図書館では、新刊が補充される度に年間9万冊もの図書が廃棄処分されています。右京中央図書館の蔵書数は213929冊(平成23年4月現在)で、毎年一図書館の半分近くの本が処分されています。本棚の容量より多くの市民の方にご利用いただけているよう、再利用可能なものが廃棄図書の中にはまだまだ綺麗な状態のものも少なくありません。そのため、市民向けにリサイクルする方法がないか提案し、市は前向きに検討するとのことでした。児童館や保育所の関係者からは、図書を分けてほしいとの声もあります。財政難の中、貴重な資源をより多くの市民の方にご利用いただけているよう、再利用可能なものが廃棄図書の中にはまだまだ綺麗な状態のものも少なくありません。そのため、

東日本大震災以降、消防は勿論、教育、福祉、水道などあらゆる事業の安全性や緊急時の対策が見直されています。水道事業においても、委員会や議会の場で管路や施設の耐震化の課題について集中して審議されました。また、水道事業の備蓄対策で外せない備蓄水の確保。京都市は水道水のPRと備蓄水の推進のために「疏水物語」というアルミボトル缶を作製

## 議会活動報告

### 緊急時の備蓄水は十分?

してPR活動での使用以外に、自動販売機や配送などで市販されております。そして、京都市はその残った分を備蓄水として位置付けている状態です。しかし、現在の備蓄水は5万本足らずで十分なものとは言えません。消防局ではアルファ化米や粉ミルク等を備蓄していますが、これらは水なしでは食べられません。そのため、安全な飲料水の確保を要求しました。

## 議会活動報告

### 緊急時の備蓄水は十分?

してPR活動での使用以外に、自動販売機や配送などで市販されております。そして、京都市はその残った